9. 過食、嘔吐により急性肺炎を繰り返す男性過食症
の1例
豊川市民病院精神科1 名古屋第二赤十字病院精神心療科2
○村田 英和 1室谷 民雄2

症例は25歳男性。中学校時代より第2次に成績低下、自閉的生活を送るようになり、親戚の会社に就職するが、特別扱いを受けており、過食、嘔吐が始まる。次第に自己制御不能となり習慣化。二度ほど急性肺炎にて治療を受け、神経科へ紹介、発熱、イライラ、頭痛、過食、嘔吐、妄想気分、被注懸、被害者概念、対人関係の拒否などの症状を認め、精神所見の症状という印象を持ち、向精神薬を中心の処方を行った。ロールジャッハテストでは内緊張の高さがうかがえる奇妙な反応もあり、知的面や感情面の不安定性も考えると診断的には分裂傾向が考えられた。その後も急性肺炎にて2回ほど入院したが、検査上異常の要因は摘えられず、原因として過食嘔吐時の脳内圧の上昇や脳管の拡張が疑われた。

10. 食行動異常患者の陥る種々の重篤な病態と対処
藤枝市立病院心療内科
○竹内 俊明 福島 一成 畑中麻里子 佐藤亜貴子

症例1：著明なるいそう、27歳、女性、主婦、AN、BPD、拒食、過食。下剤乱用にて、BW 22 kg（57.9％）で入院。IVH、低カロリー食、行動療法にて、32kgになると自己退院。4回繰り返す。症例2：ウィルス感染、19歳、女性、高校生、AN（排出型）、学年2年でAN発症。拒食、過食、acting out、28kgで3回目の入院、熱発、WBC 3,200、Pt 1万、鼻出血止め＆血小板輸血を実施。症例3：カンジダ敗血症、症例2と同一人物。入院後IVH実施、熱発、肺炎、血液培養にてカンジダ(3+)、β-D–glukan 201.8、抗真菌剤を極量併用するも、カンジダ眼内炎を併発し、硝子体摘出術施行、右眼blind、左眼(0.4xJ6)。症例4：急性腎不全、症例2と同一人物。入院後拒食にてIVH管理、熱発、呼吸困難。Cr 3.4、FDP 8.1、敗血症、DIC、急性腎不全の診断にてHD 7回実施、救急状態。症例5：肝障害、17歳、女性、高校生、AN、32kgで入院。経過中、脱水、栄養不良にてGOT 2,320、GPT 2,154、Bil 4、PT-INR 2.41、絶対安静、プラズマ、IVHで乗り切った。症例6：低血糖昏睡、症例5と同一人物。自己退院後30kgになるも再入院拒否。自宅にて昏睡で発見され救急入院。GS 20、glucose投与にて意識回復。症例7：心臓衰弱、症例5月同一人物。昏睡より覚醒後、血圧ドーパミン10mgにて50mmHg。EGCでQT延長とST低下、胸部X線にてうっ血像、心エコーにてakinesis著明、BNP 3,790、絶対安静、IVHにて栄養補給、ドーパミンの適応にて、救急し得た。症例8：自殺、25歳、男性、主婦（子どもなし）。うつ病、AN、精神科医より依頼入院、症状改善、外泊から帰院した翌日自殺。まとめ：難治性食行動障害例では、栄養失調、免疫力やホメオスタシスの低下があり、些細なことで死に直結する。慎重な経過観察と急変時の早期、的確な対応が必要である。

11. 心臓内科を受診した教員のストレス
中部労災病院MHC心療内科
○森山 裕美 佐田 彰治 堤 三希子 小杉 真代 太田理恵子 兵頭 甲博 赤嶺真理子 石川 浩二 岳原 晴

目的：当科を受診した教員の実態を把握すること。対象と方法：当科を受診した教員10例に背景調査と心理テストを施行した。1例は職場復帰までの過程を検討した。結果：うつ状態の症例が8例だった。精神は3例、通院3例、転院4例で、終診・通院

心身医・2001年6月・第41巻 第5号